

## 武蔵野日曜聖書講筵 降誕節

## わが主キリスト・イエス

## ――ルカ伝第2章1～20節――

1993年12月19日

小池辰雄

神話的な現実こそ高次な現実 旧・新約は聖霊の光で読む 十字架と聖霊は絶対に切り離してはいかん 特別な唯一者 終ることなるべし 聖霊の愛がイエスを出現させた 大歓喜の音 信 童子の君 聖書くらい面白い本はない 十字架と聖霊の預言

## 【ルカ2】

1 その頃、天下の人を戸籍に著かすべき詔令カイザル・アウグストより出づ。  
2 この戸籍登録は、クレニオ、シリヤの総督たりし時に行われし初めのものなり。  
3 さて人みな戸籍に著かんとて、各自その故郷に帰る。4 ヨセフもダビデの家系また血統なれば、5 既に孕める許嫁の妻マリヤとともに、戸籍に著かんとて、ガリラヤの町ナザレを出でてユダヤに上り、ダビデの町ベツレヘムという所に到りぬ。  
6 此処に居るほどに、マリヤ月満ちて、7 初子をうみ之を布に包みて馬槽に臥せたり。旅舎におる所なかりし故なり。

8 この地に野宿して夜、群を守りおる牧者ありしが、9 主の使その傍らに立ち、主の栄光その周囲を照したれば、甚く懼る。  
10 御使かれらに言う『懼るな、視よ、この民、一般に及ぶべき、大なる歓喜の音信を我なんじらに告ぐ、  
11 今日ダビデの町にて汝らの為に救主うまれ給えり、これ主キリストなり。  
12 なんじら布にて包まれ、馬槽に臥しおる嬰兒を見ん、是その徴なり』  
13 忽ちあまたの天の軍勢、御使に加わり、神を讃美して言う、  
14 『いと高き所には栄光、神にあれ、地には平和、主の悦び給う人にあれ』  
15 御使等さりて天に往きしとき、牧者たがい語に語る『いざ、ベツレヘムにいたり、主の示し給いし起これる事を見ん』  
16 乃ち急ぎ往きて、マリヤとヨセフと、馬槽に臥したる嬰兒とに尋ねあう。  
17 既に見て、この子につき御使の語りしことを告げたれば、  
18 聞く者はみな牧者の語りしことを怪しみたり。  
19 而してマリヤは凡て此等のことを心に留めて思い回せり。  
20 牧者は御使の語りしごとく凡ての事を見聞せしによりて、神を崇め、かつ讚美しつつ帰れり。



## ●神話的な現実こそ高次な現実

今日は「わが主キリスト・イエス」という題にしました。皆さんも一人お一人、「わが主イエス・キリスト」という気持ちで――この「わが」というのは皆さんお一人お一人のことで――私もその一人というわけです。キリストは、

「われはアブラハムより先に在りしなり」

という。アブラハムどころでない。キリストは天界において、霊界において神と共に永遠の昔から永遠の未来に至るまで、霊的に存在している方です。キリストの霊的存在というのは大変なことです。それが或る時、地上に現れた。正に降誕なんです。天から降ってきた。これは普通の人には分らん。絶対次元の世界の現実です。相対次元では分からないのが本当なんです。次元の非常に高次な世界から低次な次元の世界に降りてこられた。しかもそれはイスラエルの宗教が行き詰まったという時に。

パリサイ派が跋扈して、我を義しとしているようなご連中。律法には詳しい、またそれをよく守っているといったようなことで自分の信仰的な実存を誇っているようなご連中。これがキリストから言わせると、

「偽善なる学者、パリサイ人」

というわけです。そういう時に神さまが霊界のキリストを地界にイエスとして降誕させた。それは正に、普通の生まれ方とはちがう。聖霊によってマリヤがみもごった。

うまやどのおうじ

厩戸皇子の聖徳太子の誕生にも多少似たようなことがあります。よく「神話」といい

ますね。相対的な歴史よりもっと高い高次の現実を神話というような言い方をする。神話的な霊的な現実をいいかげんにしては、聖書は読めない。創世記から黙示録にいたるまで、そのような現実から相対界に現れた事実が聖書です。

「こんな事があるか？」

なんて言ったら、分からない。「こんな事があるか」と思われるほどに聖書の内容は普通とちがう。ということは、次元の高い世界を相対次元の言葉で表現しているから、分からないわけです。

「処女マリヤが神の子を産んだ」  
おとめ

ということは普通の人には聖書物語くらいにしか思わない。

「そんな事があるか？」

と、いわゆる自然科学的には分からない。そういう絶対次元の世界に我々の魂がはいると、

「それは本当だ」

ということがはつきり言えるようになる。

「マリヤは聖霊によってみもごった」

というのは正にそのことです。キリストはそういう生まれ方でなければ、生まれようがないお方であった。ですから、そのことで我々は神話的な現実こそ高次な現実であるという



ことをハタと受けとらないとダメなんです。これが大前提です。

●旧・新約は聖霊の光で読む

マタイ伝1章16節に、

「<sup>16</sup>ヤコブ、マリヤの夫ヨセフを生めり。此のマリヤよりキリストと称うるイエス生れ給えり。……<sup>18</sup>イエス・キリストの誕生は左のごとし。その母マリヤ、ヨセフと許嫁したるのみにて、未だ偕にならざりしに、<sup>19</sup>聖霊によりて孕りたること顕れたり。<sup>20</sup>夫ヨセフは正しき人にして之を公然にするを好まず、私に離縁せんと思う。」

ヨセフは「何か知らんけれども彼女は別な男と交わったらしい。これでは離縁するよりか仕方がない」と。高次な事が分からないものだからヨセフらしい。離縁した方が彼女のためになると思った。

<sup>20</sup>斯てこれらの事を思いめぐらしおるとき、視よ、主の使、夢に現れて言う『ダビデの子ヨセフよ、妻マリヤを納るる事を恐るな。その胎に宿る者は聖霊によるなり。』

素晴らしい宣言です。聖霊によって神の子が現れた。聖霊によらなければ、キリストは現れない。そういう高次元な所から来られるので、普通の現れ方ができない。正にこの通りなんです。

<sup>21</sup>かれ子を生まん、汝その名をイエスと名づくべし。己が民をその罪より救い給う故なり』

「イエス」とは「神は救なり」という意味です。ヘブライ語の「イエホシユア」（ヨシユア）からくる。はつきりと主の使が夢に現れた。

夢というのは非常にはつきりした普通の現実と違った現実が夢として現れる。私は時々それを体験してるから知ってます。むしろそういう夢で凄いことが示されたりする。夢がいわゆる夢でない。また、

「若い人は夢をもたなくてはいかん」ということは

「大希望をもて」

という意味で、夢というのは素晴らしい将来に対する希望を表す言葉でもある。夢のないものはダメだというわけです。

<sup>22</sup>すべて此の事の起こりしは、預言者によりて主の云い給いし言の成就せん為なり。

特にイザヤ書ですね。

曰く<sup>23</sup>『視よ、処女みごもりて子を生まん。その名はインマヌエルと称えら



れん』之を<sup>と</sup>釈けば、神われらと偕に<sup>いま</sup>在すという<sup>こころ</sup>意なり。」（マタイ1・16～23）  
これは正にイザヤ書7章にあります。

「<sup>14</sup>この故に主みずから一つの予徴を<sup>しるし</sup>なんじらに賜うべし。視よ、おとめ<sup>はら</sup>孕みて子をうまん。その名をインマヌエルと<sup>とな</sup>称うべし。」（イザヤ7・14）

と。キリストの別の名は「インマヌエル」「神われらと共に」というヘブライ語です。素晴らしい名前ですね。その少し前の9節に、

「<sup>9</sup>……もしなんじら信ぜずばかならず立つことを得じと」（イザヤ7・9）

非常に力強い言葉です。「信ずる」というのは

「それをまこととする、本当だとする」

ということです。

「もし信じなければお前たちは長く生きてはいられないぞ」

と、これはルターが註をした言葉です。旧約から新約にわたって、

「聖書は我につきて証しするなり」

とキリストは旧約聖書のことをそう言っておられる。旧・新約は聖霊の光で読むと、一貫しているわけです。決してユダヤの經典ではない。ユダヤ人はそれをそういう角度から読まないから、キリストの預言として受けとらないから、しょうがないけれども。相変わらずユダヤ人はその点は頑くななんだ。普通のクリスチャンでも、いわゆる聖書研究家というのは、みな旧約のその時の相対的な現実ばかり研究して、

「これは聖霊の光で読まれるべきものだ」

ということをやらない。旧・新約は聖霊の光で読んでください。

●十字架と聖霊は絶対に切り離してはいかん

「聖霊、聖霊」とよく言う人があるけれども、十字架が土台でなかったらダメです。十字架と聖霊は絶対に切り離してはいかん。ややもすると、十字架が薄くなっている。キリストがルカ伝12章で言っておられる。

「<sup>49</sup>我は火を地に投ぜんとて<sup>きた</sup>来れり。

「火」というのは聖霊のことです。聖霊という火を地に投ぜんために来たと。

此の火すでに燃えたらんには、我また何を<sup>はら</sup>か望まん。

聖霊が本当に臨んだら、もう後はどうでもいいんだよと。

<sup>50</sup>されど我には受くべきバプテスマあり。

これです。「受くべきバプテスマ」とは十字架のこと。十字架を通らなければ聖霊はくれないという。

「聖霊を投げようと思うけれども、先ず十字架に架からなければならぬ。贖罪を遂げなければ聖霊は来ないんだ」



ということです。

その成し遂げらるるまでは思い逼ること如何許ぞや。

その次に、

51 われ地に平和を与えんために来ると思うか。われ汝らに告ぐ、然らず、反  
つて分争なり」(ルカ12・49～50)

とある。「平和」と訳してあるけれども、これは「平安」です。神さまと我々との関係がちゃんと成り立つことを平安という。平和ではない。平和というのは人と人との間のこと。平安がないところには平和はない。神・キリストと我々の関係がちゃんと立っているのを平安という。

この平安という言葉が最初に出てくるのは旧約の士師記第6章です。

「23 エホバ之にいいたまひけるは、心安かれ怖るる勿れ汝死ぬることあらず。

24 ここにおいてギデオン彼所にエホバのために祭壇を築き、之をエホバシャ

ロムと名づけたなり」(士師記6・23～24)

復活のキリストが現れた時にこの「心安かれ」という言葉が使われた。「エホバシャロム」とは「平安の神」ということです。「シャローム」というのは「平安」という字です。ユダヤ人が「こんにちは」「さようなら」という時に「シャローム」という。

「神さまの平安があなたにあるように」

という意味です。縦の関係が平安です。我々に大事なものは神・キリストと我との関係、これが平安です。その時にはじめて、

「わが主キリスト・イエス」

ということが言えるわけです。「主」というのは、別な言葉でいうと、「救い主」ということ。

「わが救い主」

ということですよ。

### ●特別な唯一者

イエスの降誕は、どういう所に生まれたかというのと、どん底の所に生まれた。宿屋なんか一つもない。泊まる所がない。馬槽の中にキリストが最低な生まれ方をなさった。これが福音の世界です。どん底の生まれ方。いわゆる王侯貴族とは大違いです。

キリストが生まれた時に、ローマ帝国の最初のカイザル、アウグスト・オクタ비아ヌス  
が生まれた。「アウグスト」とは「尊厳なるもの」という意味です。ローマ帝国の第一人者  
が現れた時に、馬槽の中に世界の唯だ一人のひと――これは第一人者ではない、唯一、一人者  
です――特別な唯一者が現れた。非常なコントラストです。しかも、これは馬槽の中に、  
石灰岩の洞窟らしい。その片隅の馬槽の中にキリストは生まれられた。揺籃は馬槽なんだ。  
大変な方です。



霊界の素晴らしい存在が、名もない処女<sup>おとめ</sup>マリヤから聖霊の力でもって、聖霊がマリヤの中に入ってきて、そしてイエスを生んだ。普通の常識では考えられない凄い高次元の現実が現じた。

「聖書に書いてあるから、仕方がないから信じておこう」

なんてではダメです、

「そういう生まれ方こそキリストらしい」

とはつきりと告白するようにならないと。

私は告白している。お説教なんかしていない。私は「教える」という言葉は嫌いだ。教師なんてのは嫌いなんだ、仕方がないから教師をやりましたけれども。「キリスト教」ではない。キリスト道です。我々はみな道の民です。自分の足で歩かなければダメです。

「教えが分かりました」  
ではダメです。

「キリスト教が分かりました、聖書が分かりました」

なんて、何を言っているか。聖書の中に投身しなければダメです、その現実の中に自分を投げ入れるようなことでなくては。キリストの中に自分を投げ入れる。とにかく、相対的な汝と我の間ではダメです。

「汝と我が――我が汝か、汝が我が分からん――一如だ、一つだ」

ということ。これが夫婦関係でも、本当の友人関係でも、密なる世界はみな一つの世界です。そうすると、

「その友人のためには生命をも棄てるぞ」

というような気持ちにお互いになつていくわけです。それを

「<sup>ふんけい</sup>刎頸の交わり」

という。刎頸とは首を斬ることです。あの友のためには首が斬られてもいいんだという。

### ●終ることなかるべし

ではルカ伝に入ります。

「<sup>26</sup>その六月めに、御使ガブリエル、ナザレというガリラヤの町におる処女<sup>おとめ</sup>のもとに、神より遣<sup>つか</sup>さる。<sup>27</sup>この処女はダビデの家のヨセフという人と許嫁<sup>いいなづけ</sup>せし者にて、其の名をマリヤと云う。<sup>28</sup>御使、処女の許にきたりて言う『めでたし、恵まるる者よ、主なんじと偕<sup>い</sup>に在<sup>いま</sup>せり』<sup>29</sup>マリヤこの言によりて、心いたく騒ぎ、斯る挨拶は如何なる事ぞと思ひ廻<sup>めぐ</sup>らしたるに、<sup>30</sup>御使いう『マリヤよ、懼るな、汝は神の御前に恵みを得たり。<sup>31</sup>視よ、なんじ孕<sup>み</sup>りて男子を生まん、其の名をイエスと名づくべし。<sup>32</sup>彼は<sup>おお</sup>大ならん、至高者<sup>いとたかきもの</sup>の子と称えられん。また主たる神、これに其の父ダビデの座位<sup>くらゐ</sup>をあたえ給えば、<sup>33</sup>ヤ



コブの家を永遠に治めん。その国は終ることなかるべし』(ルカ1・26、33)

「その国は終ることなかるべし」

とは大変な注目すべき言葉です。「終りなき国」だという。「終り」というのはダメなんです。

「これで完成した」

なんていうのはダメです。完成したら、その先はもうない。我々は終りなき仕事をしないと。地上では未成交響楽です。これが本当なんだ。

「これで完結しました」

なんてはダメです。

「私の著作集は十巻で終わりました」

ではない。「全十巻」なんてことを書かなかった方がよかった。『エン・クリスト』誌も第53号(1993年1月冬季号)でお終いにしたけれども、実は『エン・クリスト』は終わらない。常識的な意味で

「これでお終い」

と書きましたが、実は終わらない。

だから、別な形で私の話を何か書き物にして、内輪の方々にお届けするのもいいことではないかと思っている。録音をしてあっても、やはり記録になっていないとね。要するに、終りなく進んでいく。この集会も終りがない。

手島さんが仆れた時に――無教会では先生が仆れると、みなその雑誌はお終いにしてしまふ――私のところに聞きにきて、

「手島先生が亡くなったので『生命の光』誌はやめようかと思っています」

と言ったから、私は即座に、

「何を言っているか。これは聖霊の雑誌だ。聖霊の雑誌はどこまでも続けなければ

ダメだ。君たちがバトンタッチして先に進め」

とはつきり言ってやった。

聖霊の世界の仕事には終りがない。終り無き仕事です。ゲーテもダンテも素晴らしい『ファウスト』や『神曲』という詩を書きましたけれども、あれもあれで終りだと思ったらダメです。ゲーテやダンテは決して終わりだとは思っていないでしょう、ああいう凄い魂は。

私は自分の生涯で、

「死んだ」

なんていう言葉は使わせない。私は「死ぬ」という言葉は大嫌いだ。キリストをいただきたい。聖霊の器は死なない。これは正に往生おうじょうする、往きて生きている。

「小池は大往生した」

と書かなくては。地上の生活から次の世界へ往きて生きる。

「我を信ずる者は死しても死なず」



とキリストはちゃんと書いておられるんだ、

「死しても死なないんだ」

と。そういう烈々たる生き方で生きてくださいよ。どんな艱難があろうと、いろいろな事があれば逆に神を讃美して進んでいく。神讃美です。

「あらゆる人生の状況、境遇において、ただ神讃美だけが私の気持です」

と。讃美歌を歌っていればいい。讃美歌が歌えなくなったら、おしまいです。風呂に入りながら、讃美歌を歌っていればいい。

### ●聖霊の愛がイエスを出現させた

そういう不滅の人物が霊界から現れたのが、キリストの降誕です。そして、我々と同じ現実の中に入りながら、超現実の世界を展開していった。イザヤ書53章の贖罪のキリストは、イザヤ書35章の天国的な現実を展開していった。キリストはイザヤ書53章の贖いをちゃんと受けとりながら――これは十字架の贖いです――しかも、地上で35章の天国を現じながら歩いていった。

マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの福音書はみなキリストが地上でどのようなことを言われたか、どのようなことをなさったか、全部これは天国的な言葉です。正にそういう喜びの音信おとずれなんです。今日は楽しい日です。

ラテン語で「ミステリウム」という言葉があります。もともと霊的な現実が正にこの「ミステリウム」です。ギリシヤ語の「ミトス」とはよく「神話」という訳し方をしている。神話というのは神話的な不思議な事態、次元で、それは実は高次元な霊的な次元です。普通の人は、「ミトス」というと、何か架空的なように思うけれども、そうではない。ミトスの現実には架空のところではない。霊的な現実です。我々は聖霊の世界に入ると、普通の相対的現実よりももう一つ次元の高い現実の方が楽しくなる。そこで聖書が本当に読めるようになる。

だから、

「マリヤよ、恐るな。ヨセフと交わらなくたって、お前は大変なひとを生むことになる。聖霊がお前をおおうからだ」

と。そうでなければ、キリストは現れない。ヨセフも

「いや、マリヤは誰か他の男とやったか。それでは俺は離縁する」

なんて、そんなことを思ったんだ。冗談じゃない。

「<sup>34</sup>マリヤ御使に言う『われ未だ人を知らぬに、如何にして此の事のあるべき』  
<sup>35</sup>御使こたえて言う『聖霊なんじに臨み、至高者の能力ちからなんじを被わん。此

の故に汝が生むところの聖なる者は、神の子と称えらるべし。』(ルカ1・34、

35)

こういうところを読むと、そういう凄い次元だということ、私たちは非常に力がくる、



光がくる。しかも、その聖霊は愛の霊です。高次な愛の霊、アガペーです。

「聖霊の愛」ということを手島さんが最初に言った。無教会で私はそういう言葉を聞かなかった。「聖霊の愛」とは素晴らしい言葉だなと思った。私や手島さんは無教会の出身だから、無教会は非常に批判的なんです。批判的で、愛でない。頭ですぐ判断して、

「どうだ、こうだ」

と言う。ものを見て、批判的な気持ちが先に立つひとはダメです。愛をもつてそれに本当に共感し、それを包むような魂でないよね。愛ほど力強い現実はない。

マリヤを包んだ聖霊は正に愛の聖霊である。聖霊の愛がイエスをここに出現させた。降誕とはそういうことです。洗礼のヨハネのお母さんが聖霊によつてそのことを非常に喜んだと書いてあるでしょ。洗礼のヨハネはキリストの先駆者です。

## ●大歓喜の音信

ルカ伝2章3節から、

「<sup>3</sup>さて人みな戸籍に著かんとて、<sup>4</sup>各自その故郷に帰る。<sup>5</sup>ヨセフもダビデの家系また血統なれば、<sup>6</sup>既に<sup>はら</sup>孕める許嫁の妻マリヤとともに、戸籍に著かんとて、ガリラヤの町ナザレを出でてユダヤに上り、ダビデの町ベツレヘムという所に到りぬ。

「ベーツレヘム」というのは「パンの家」ということです。ブレッドハウス。

此処に居るほどに、マリヤ月満ちて、<sup>7</sup>初子をうみ之を布に包みて馬槽に臥せたり。<sup>8</sup>旅舎<sup>はたじや</sup>における所なかりし故なり。

<sup>8</sup>この地に野宿して夜、群を守りおる牧者<sup>ひつじかい</sup>ありしが、<sup>9</sup>主の使その傍らに立ち、主の栄光その周囲を照らしたれば、<sup>10</sup>甚く<sup>いた</sup>懼る。<sup>11</sup>御使<sup>みつかい</sup>かれらに言う『懼るな、視よ、この民、一般に及ぶべき、大なる歓喜の音信を我なんじらに告ぐ、

クリスマスは全く大歓喜の音信です。ここにも「大なる歓喜の音信」と預言している。

<sup>12</sup>今日ダビデの町にて汝らの為に救主<sup>すくいぬし</sup>うまれ給えり、これ主キリストなり。

<sup>13</sup>なんじら布にて包まれ、馬槽に臥しおる嬰兒<sup>みどりご</sup>を見ん、是<sup>しるし</sup>その徴なり』

「その嬰兒が救主だ、大なる歓喜の徴なんだ」と。「徴」とは現象体ということですよ。

<sup>14</sup>忽ち<sup>たちま</sup>あまたの天の軍勢、御使に加わり、神を讚美して言う、<sup>15</sup>『いと高き所には栄光、神にあれ、地には平和、主の悦び給う人にあれ』

「平和」ではない。平安です。平安から自ずから平和という横の概念が出てきますけれども、平安を忘れてはダメです。

「地には平安、主の悦び給う人にあれ」

ということ。「神にあれ、人にあれ」と書いてあるが「あれ」という言葉はない。原文は、「いと高き所には栄光、神に。地には平安、主の悦び給う人に」



です。

「平安がやってきた。それだから、大いにあってください」

という、二つの気持をその後にもっている。こうやって動詞を入れてしまうと本当はダメなんだ。動詞がない方がいい。

「いと高き所には栄光、神に。地には平安、主の悦び給う人に」

やってきた。しかも、大いにあれという、現在完了と未来と両方とも含んだような二つの動詞が略されている。詩というものは、よくそういうように含めて、後は略す。詩文が散文よりも味があるのは、そういうことなんです。散文は何でも説明してしまう。説明しちやったらダメです。これは原文でも、「在れ」とは何も書いてない。

15 御使等さりて天に往きしとき、牧者たがいに語る『いざ、ベツレヘムにいたり、主の示し給いし起これる事を見ん』<sup>16</sup> 乃ち急ぎ往きて、マリヤとヨセフと、馬槽に臥したる嬰兒とに尋ねあう。」(ルカ2:3～16)

## ● 童子の君

イザヤ書3章に不思議な言葉がある。

「1 みよ主ばんぐんのエホバ、エルサレムおよびユダの頼むところ倚るところなる凡てその頼むところの糧、すべてその頼むところの水、<sup>2</sup> 勇士、戦士、<sup>3</sup> 審士、預言者、卜筮者、長老、<sup>4</sup> 五十人の首、貴顕者、議官、芸に長たる者および言語たくみなるものを除きたまわん。

そんなものはダメだ、そうではないんだという。3節までをひっくり返してしまつて、<sup>4</sup> われ童子をもてかれらの君とし、嬰兒にかれらを治めしめん。」(イザヤ3:1～4)

という妙な言葉がある。これはキリストの預言です。12節に、

「……あわが民よ、なんじを導くものは反てなんじを迷わせ汝のゆくべき途を絶つ」(イザヤ3:12)

とある。イザヤ書2章の始めのあたりからずっと、その預言に關係している。

「<sup>2</sup> すえの日にエホバの家の山はもろもろの山のいただきに堅立ち、もろもろの嶺よりもたかく挙がり、すべての国は流れのごとく之につかん。<sup>3</sup> おおくの民ゆきて相語りいわん、いざわれらエホバの山にのぼりヤコブの神の家にゆかん、神われらにその道をおしえ給わん、われらその路をあゆむべしと。そは律法はシオンよりいで、エホバの言はエルサレムより出づべければなり。<sup>4</sup> エホバはもろもろの国のあいだを裁き、おおくの民をせめたまわん。斯てかれらはその剣をうちかえて鋤となし、その鎗をうちかえて鎌となし、国は国にむかいて剣をあげず、戦鬪のことを再びまなばざるべし。」(イザヤ2:2～4)



(4)

万国に戦争をやめさせるぞという。それから大事な言葉は、

「この日には目をあげて高ぶるもの卑せられ、驕る人がめられ、唯エホバのみ高くあげられ給わん。」(イザヤ2・11)

「この日には高ぶる者はかがめられ、驕る人はひくくせられん、唯エホバのみ高くあげられ給わん。」(イザヤ2・17)

「なんじら鼻より息のいでいりをする人に倚ることをやめよ、斯るものは何ぞかぞうるに足らん。」(イザヤ2・22)

「神さまによれ」と。そして、今の3章4節が大事な言葉になる。

「われ童子をもてかれらの君とし、嬰兒にかれらを治めしめん。」(イザヤ3・4)

という不思議な言葉が出ている。こういう不思議な言葉が出てくるのには全く驚きます。これはみなキリストに関する霊的な預言が出ている。いきなりこんなことが出てくるのだから、大変なものだね、みなやはり神の霊によって示されている言葉だから。考えて語っている言葉ではない。頭の世界ではないから。やはり聖書は聖霊でもって一貫している。

### ●聖書くらい面白い本はない

神さまの審きは、その後から恵みがくる。審ききらない。はつきり審くと、その後で今度は恵みがくる。

「恵みは神の審きをおおう」

というような言葉がヤコブ書にある。

「憐憫を行わぬ者は、憐憫なき審判を受けん、憐憫は審判にむかいて勝ち誇るなり」(ヤコブ2・13)

とある。また、こういう言葉がある。

「聖書に『神は我らの衷に住ませ給いし霊を、妬むほどに慕いたもう』と云えるを虚しきことと汝ら思うか」(ヤコブ4・5)

我々の中に住まわせた聖霊を神さまは妬むほどに慕いたもう。サタンに取られては大変だというので、

「妬むほどに慕いたもう」

と妙な言い方をしている。我々は神さまの妬みの愛で守られている。

「神は更に大なる恩恵を賜う。されば言う『神は高ぶる者を防ぎ、謙だる者に恩恵を与え給う』と。この故に汝ら神に服え、悪魔に立ち向かえ、さらば彼なんじらを逃げ去らん。神に近づけ、さらば神なんじらに近づき給わん。罪人よ、手を潔めよ、一心の者よ、心を潔よくせよ。なんじら悩め、悲しめ、泣け、なんじらの笑を悲歎に、なんじらの歓喜を憂に易えよ。主の前に己を



卑<sup>ひく</sup>うせよ、然らば主なんじらを高うし給わん。」(ヤコブ4:6～10)

「いい加減な喜びでなくて、本当の悲しみにおいて逆に今度は本当の喜びがくるぞ」なんて書いてある。聖書の味は尽きない。聖霊の光で読んでくださいよ、十字架・聖霊の光で。十字架と聖霊は絶対に不可離の関係です。

「聖霊の火を投げようとしたけれども、我には受くべきバプテスマ、十字架があるんだ」

という、ルカ伝12章49、50節のキリストの言葉は非常に大事な言葉です。そういうポイントをしっかりつかまなくてはいいかん。そうすると後は楽に読めるようになる。み霊の光で聖書を読んでいると、もう他の本は面白くなくなってしまう。聖書くらい面白い本はない。聖書は力を与え、光を与え、生命を与え、愛を与える。十字架も深い愛だし、聖霊はもちろん愛です。キリストは全部引き受けた。キリストというひとは大変なカタです。

その降誕なんだ、今日は。それをもう既に預言しているんだから。ルカ伝1章に天使がブリエルがちゃんと示してくれている。マルコ伝に、

「4バプテスマのヨハネ出で、荒野<sup>あらの</sup>にて罪の赦<sup>ゆるし</sup>を得さする悔改<sup>くいあらため</sup>のバプテスマを宣伝<sup>のべつた</sup>う。5ユダヤ全国またエルサレムの人々、みな其の許に出で来りて罪を言いあらわし、ヨルダン川にてバプテスマを受けたり。6ヨハネは駱駝<sup>らくだ</sup>の毛織<sup>き</sup>を著、腰に皮の帯して、蝗<sup>いんじ</sup>と野蜜<sup>くち</sup>を食えり。7かれ宣伝えて言う『我よりも力ある者、わが後に来る<sup>きた</sup>。我は屈<sup>かが</sup>みて、その靴の紐をとくにも足らず、8我は水にて汝らにバプテスマを施せり。されど彼は聖霊にてバプテスマを施さん』(マルコ1:4～8)

とある。

### ●十字架と聖霊の預言

十字架・聖霊の幼子のことを既にシメオンが預言している。

「25視よ、エルサレムにシメオンという人あり。この人は義かつ敬虔<sup>けいけん</sup>にしてイスラエルの慰められんことを待ち望む。聖霊その上に在<sup>いま</sup>す。26また聖霊に主のキリストを見ぬうちは死を見ずと示されたりしが、27此のとき、御霊に感じて宮に入る。両親その子イエスを携え、この子のために律法の慣例<sup>しきたが</sup>に遵<sup>したが</sup>いて行わんとて来りたれば、28シメオン、イエスを取りいだき、神を讃<sup>ほ</sup>めて言う、29『主よ、今こそ御言<sup>したが</sup>に循<sup>したが</sup>いて僕を安らかに逝<sup>ゆ</sup>かしめ給うなれ。30わが目は、はや主の救<sup>すくい</sup>を見たり。31是もろもろの民の備え給いし者、32異邦人を照らす光、御民イスラエルの栄光なり』33かく幼兒<sup>おなな</sup>に就きて語<sup>かた</sup>ることを、其の父母あやしみ居たれば、34シメオン彼らを祝して母マリヤに言う『視よ、この幼兒<sup>おなな</sup>は、イスラエルの多くの人の或は倒れ、或は起<sup>た</sup>たん為に、また言い逆<sup>さか</sup>いを受くる



徴<sup>しるし</sup>のために置かる。35——剣<sup>つるぎ</sup>なんじの心をも刺し貫くべし——これは多くの人の心の念<sup>おもい</sup>の顕<sup>あらわ</sup>れん為なり』(ルカ2・25～35)

「言い逆いを受くる徴」とある。キリストは大体、言い逆いを受ける。

「5希望<sup>のぞみ</sup>は恥を来らせず、我らに賜いたる聖霊によりて神の愛、われらの心に注げばなり」(ロマ5・5)

と。聖霊は愛の霊だから聖霊によつて神の愛・キリストの愛が我らの心に注ぐ。キリストの降誕を受けとるためにはやがて——シメオンが十字架のことも既に暗に預言している——十字架に架かつて聖霊を与えるところのキリストを受けとる。もう降誕の時から、十字架と聖霊の預言が出ているわけですから、大変なひとだね。そして、受けとらない者は躓く。

「25主は我らの罪のために付<sup>わた</sup>され、我らの義とせられん為に甦えらせられ給へるなり」(ロマ4・25)

と。そういうわけで天から降<sup>くだ</sup>ってきた。それも、ユダヤ教が行き詰まりパリサイが跋扈<sup>はつこ</sup>した、そういうギリギリの時点でもつて、キリストは天界から現れた。処女マリヤをとおして聖霊によつて。キリストの降誕は歴史を二分するところの瞬間なんです。歴史を二分している。

「これから本当の光の世界だ。どんなに闇が深くてもこの光には勝てない」

と。人間は地上の相対的な所でサタンに適当に取り扱われている。けれども、それでキリストの光がダメになつていっているわけではない。

レンブランドの非常に深刻な絵にはよくどこからか光がさしている。そういうように光がさしているわけなんです。我々はキリストを受けとることによつて、光の子になる。「光」とは素晴らしい字です。太陽が七つの光を放っている姿、太陽の輝いている姿からきた字ですから。もともと御天道様<sup>おてんとう</sup>なんだ。ミカ書に「闇も光だ」というような言葉がある。

「8我が敵人<sup>あだしびと</sup>よ我につきて喜ぶなかれ、我<sup>たお</sup>仆るれば興<sup>おき</sup>あがる。幽暗<sup>くらき</sup>に居ればエホバ我の光となりたもう。9……エホバついに我を光明<sup>ひかり</sup>に携えいだし給わん。

而して我エホバの正義<sup>ただしき</sup>を見ん」(ミカ7・8…9)

「正義」という訳し方はよくない。「エホバの義を見ん」でいい。「幽暗<sup>くらき</sup>に居ればエホバ我の光となりたもう」という言葉です。

「28御使<sup>おとめ</sup>、処女<sup>いまま</sup>の許にきたりて言う『めでたし、恵まるる者よ、主なんじと偕に在<sup>いま</sup>せり』」(ルカ1・28)

聖霊が宿つて、マリヤはキリストを生んだ。普通の現れ方とはちがう。これがイエスの降誕です。正に降誕なんだ。

だから、不思議でも何でもない。そういう素晴らしい霊的な次元、そこに自分をおいて、「これが本当の現実だ」

と。我々の現実はこちらが本当で、相対的な現実<sup>現実</sup>は夢のごとし、消えてゆく。けれども、この絶対次元からの光でもつて、相対次元の中の本ものはみな天界に映る。反映していく。

